

Eureka XI

六年制通信 No.12 令和5年6月30日(金)号

また迷走でしょうね

最近、でもないか、かなり前から「彼の生き様」といった表現が多く聞かれるようになりましたが、あれ、耳にするたびに不愉快になります。君たち、平気ですか。「生き様」の発音は「いきざま」で、私が不愉快になるのは「ざま」のところ。「彼の生き方」とすればいいところを、わざわざ濁音を使う必要はないと思うのですが。様は「さま」と清音で読めば、例えば「柳が風に揺れる様は…」のように風景描写に用いたり、藤井聡太七冠の和服姿は「様になっている」のように見た目がいいという意味に使います。見た目が汚くなると濁音で「様をみろ」とか「無様だな」などと言うわけですね。ですから「彼の生き様」などと言えば、彼がよほど汚い生き方をしてきたのに違いないと思ってしまって私は不愉快になるわけです。だいたい日本語は濁音にいいイメージを与えていません。「コロコロ」は小石が転がる感じで怖くはないですが「ゴロゴロ」は大きな石か雷で、ちょっと恐怖を感じます。「サラサラ」は清流が流れるイメージですが「ザラザラ」にいいイメージはないでしょ。「トロツと」は何だか美味しそうですが「ドロツと」は不味そうじゃないですか。他にもたくさんあるでしょうから、諸君、清音と濁音で日本人の感じるイメージがどのくらい違うかを探究してみたいかがでしょうか。英語にも擬音語や擬態語はたくさんありますから日本語と比べてみたら面白いかもよ。私のお気に入りには **thud** です。これ重いものが落ちる音を表していて、つまり日本語では「どさっ」ですな。英語で「さっど」、なんか日本語と反対になっているでしょ。初めて知った時笑ったわ。もっとも、こういう研究はすでに誰かが必ずやっていますけどね。昔、学生の時にマイケル・ジャクソンのことをジャイケル・マクソンと言い間違えたのがいて、皆で大笑いしたのですが、これ、実は規則的な間違え方で頭音転換といって、語頭の「マ」と「ジャ」だけが入れ替わるのですね。「ゲリラ豪雨」と言うつもりで「ゴリラ…」と始めてごらん、後半はきっと「ゲイウ」になるでしょうし、「ドン・ジョバンニ」のつもりで「ジョン…」と言えば「ドバンニ」と言ってしまうから。私たちはマイケル・ジャクソンの言い間違いで、これは何か規則性があるのではないかと盛り上がったのですが、とっくの昔に解決されていて英語では Spoonerism (Spoonerism) と言われる現象なのでした。ま、たいていのことは誰かが先に研究しているということですが、それでも君たちは疑問に思ったことを大切に、自分の力で調べることが大切です。疑問は至る所にあるのですから、普段からアンテナを高くして不思議を見つけ自分なりに解決すると、それがユリイカ体験です。不思議を見つける基本姿勢としては、自然に対する観察眼も必要でしょうが、まずは文章

をちゃんと読めること、書けること、そして語彙力をつけることが肝心です。世の中の様々な現象、心の中に湧き上がるいろんな感情も含めて、それらを言語化できることがユリイカ体験に至る道です。国語力とは畢竟語彙力なのかもしれません。語彙力にはもちろん比喩も含まれます。日本語には豊かな比喩表現がありますからね。たくさん本を読んで、豊かな言葉を身につけましょうね。

私は自分の言っていることが間違っているとは思っていないのですが、共通テストの試作問題の「国語」を見て、また文科省の迷走が始まったかため息をついてしまいました。学校の国語の時間では日本語の豊かな語彙や表現、それに比喩などを習うのだと思っている人は多くいると思いますが、「大学入試センター試作問題」はその延長線上に作られた問題とは到底思えません。正直な感想を書けば「なんじゃ、こりゃあ！」です。現在あちこちから批判されているらしいから、本試験では少しはましになるかもしれませんが、あの手のデータ読みの練習はしておかないといけなんでしょうね。模試にも反映されるはずですから、そこでもしっかり練習しましょう。

今週のおすすめ

・市川 寛 『検事失格』 (毎日新聞社)

この本は、取り調べで「ぶっ殺すぞ」などの暴言を吐き自白を強要し冤罪を生んだとして検事をクビになった男の懺悔録とも言えますが、上司に逆らえずダメだと思いながら起訴してしまった根性なし男の言い訳の書とも言える、かな。これ、君たちが読んで面白いのかどうか…。ただ、将来検事を目指している人は読んだ方がいいかもね。冤罪を生んだ検事も辞めたら弁護士ができるんですね。初めて知りました。

やがて君たちも仕事を持つでしょう。多くの方は上司や部下、そういう人間関係の中で自分の役割を果たす。それが毎日の仕事、そういう人は多いでしょうね。よく上司に恵まれたとか、上司が最悪でとか、そんな話を聞きますからね。さて、君たちは自分の意に添わぬ命令が来たらどうするか。NOと言えるかどうか。市川さんは言えなかったわけですね。何と言っても権威とプライドの塊と言われる秋霜烈日の検察ですからね。メンツを潰されるわけにはいかないわけです。この本を読むと、市川さんが追い詰められていく様子がよくわかります。どこの世界にもいるのでしょうか、立場が危うくなると保身に走りスケープゴートを作ろうとする上司がいるんですね。いや、組織ぐるみかな。私はこの本の途中から、今から10年以上前の村木厚子さんの冤罪事件を思い出しながら読んでいました。あの時の検事は懲戒免職になって実刑判決を受け服役したはずです。ですから市川さんのように弁護士になることもできないはず。ま、それだけの罪を犯したわけですから当然ですが。あの事件で検察の権威は地に落ちましたよね。村木さんは厚生労働省の有能な局長で、冤罪確定後は事務次官まで上り詰めています。よほど頭に来たのでしょうか。取り調べの様子もメディアで語りましたから検察は大恥をかいたわけ。しかし、ほとんどの検事さんたちは秋霜烈日のバッジを胸に、職務に全うしていると思いますよ。公のために尽くす立派な仕事ですもんね。

BGMは サラ・ヴォーン の ラバーズ コンチェルト でした…。